

平成九年四月十三日 和敬塾入塾式記念講演

「二十一世紀の大学像」

国立学校財務センター教授 東京大学名誉教授 天野郁夫先生

おはようございます。入塾、入学おめでどうございませう。心よりお祝いを申し上げたいと思ひます。今日は「二十一世紀の大学像」という大きな題でお話をさせていただきますになりました。どこから話を始めようかという考へておりました、皆さん方が新しく大学に入られ、また和敬塾という学寮に入られたということの意味をお話しすることから、始めさせていただきますかと思ひていませう。

皆さん方は、すでに入学式も済んで大学の学生になられたわけですけれども、大学とあなた方がこれまで過ごしてきた小学校、中学校、高等学校という学校と、どこが違うのかということ考へてみたことがありますでしょうか。皆さん方がこれまで卒業してきた学校は、英語でスクールと言ひます。大学はユニバーシティと呼ばれていませう。「大学」であつて「大学校」ではない。大学校というのは防衛大学校とか、自治大学校とか、消防大学校とか、いろいろあるんですね。それらは大学と呼ばれないで

大学校と呼ばれていませう。学校と大学というのは非常に性格が違つた組織だということ考へ、まづ、お話ししなければならぬと思ひます。

皆さん方はこれまでは生徒でした。大学に入りますと学生になります。英語で言うところピュールからステューデントになつたわけです。高校の先生は教諭と呼ばれていませうが、大学の先生は教授と呼ばれていませう。英語で言ひますとティーチャーとプロフェッサーです。皆さん方は高校を卒業する時に卒業証書ももらひました。大学を卒業しますと学位ももらひます。皆さん方は四年後に卒業する時には経済学士であるとか、文学士であるとか、工学士であるとか、学士号をもらつて卒業して行くわけです。これを学位と言ひます。卒業証書はサーティフィケート (certificate) と呼ばれますが、英語で学位というのはディグリー・ディプロマ (degree diploma) と言ひられています。

これらのことは学校と大学というものが非

常に性格の違つた組織だということ考へていませう。高校ですと皆さんは授業を受けるわけですが、大学へ行きますと、講義、演習という言葉で呼ばれていませう。しかも高等学校では時間表が決まつていませう、選択科目といつてもほんの少数でしたけれども、大学に入りますと、履修要項を渡されて、どのような科目を選択して履修するか、時間割を自分で作らなければいけません。これも大きな違いであります。

何故こんな違いがあるのかは、大学というものが基本的にどういふ性格を持つていませうかということと関わつていませう。決して偶然ではないわけです。ユニバーシティ (university) という英語の語源は、ラテン語のユニベルシタス (universitas) という言葉にあると言ひられています。フランス語、ドイツ語、英語もみんな、大学はユニベルシタスからきた言葉で呼ばれていませう。大学という言葉や組織がいつ頃生まれたのか。それは中世、十二世紀のヨーロッパだと考へられています。近代、十九世紀頃に

なるまで、南米大陸、北米大陸は別にして、ヨーロッパ以外のところに大学と呼ばれる組織はありませんでした。日本にも大学はなかったわけですね。

それは、大学というものの基本的な性格と関わっています。ユニベルシタスは何を意味しているか。私はラテン語がわかりませんから受け売りですけれども、これは「組合」を意味しているということです。何の組合かというと同業者の組合です。その頃には、パン屋のユニベルシタスもあつたし、靴屋のユニベルシタスもあつた。大学もその一つのユニベルシタス。もつとよく知られている言葉でいえばギルドですね。そのギルドがさまざまな特権を認められた組織だということは、高校の教科書で習った通りです。何よりも、誰がそのギルドのメンバーになることができるのかを決めることができる。つまり、営業とか職業の独占をしているのがギルドです。このギルドとしての組合、ユニベルシタスのもう一つの重要なことは、それが教育訓練の組織でもあつたということです。親方がいて、徒弟がいる。その真ん中に職人がいる。親方―職人―徒弟という関係がありました。親方―徒弟の関係というのは、単に仕事を一緒にしているということだけではなく、それを通じて教育訓練をしているということでありました。徒弟として入って、だんだん経験を積

んで、やがて職人になり、親方になっていくというのが、この同業組合の性格です。

そのユニベルシタスがやがて大学を指すようになった。大学というのは一体どういう同業組合なのかといいますと、学者の組合ということになります。考えてみますと、学者の組合というのは非常に特殊なんですね。他のギルドは物を作る。しかし、学者の組合は物は作らない。作るのは知識や情報です。そしてその知識や情報と売ることになります。学者は知識を売ることを商売にしている人たちで、知識人、知識の職人として、歴史の中に現われてきたわけです。大学の場合、知識というのは学問という形をとっています。学問というのは専門で分かれていますから、やがてヨーロッパの中世の大学には、基本的に四つの学部、専門学問領域ができるようになりました。一つは哲学とか人文学とか呼ばれるものです。それから医学、法学、神学、この四つの学部を持っているというのが、大学の基本的な構造になっていくわけです。

先ほどの話でいいますと、大学では親方というのは教授たちで、徒弟というのは学生たちです。学生たちは親方である教授について勉強して、学力があるところまでくると徒弟から一人前の職人になる。「ある学問をマスターしました」ということの証明書が学位です。一番最初

の学位は学士号であります。しかし、まだ学位をもらっただけでは学問を修めただけですから、すぐ親方にはなれない。そこで職人のような時代があります。そういう時代を経て、やがて教授になっていくわけですが、教授になるための、資格、試験というがあります。その一つが博士という学位です。学士はバチェラーと言いますけれども、それからドクターになり、プロフェッサーになっていくというのが大学という親方徒弟制度だといっていい。いずれにしても大学はそこで、ある学問をやる人たちが集まって互いに研鑽を積む場所としてできてきたわけです。

一種のギルド、組合ですから、特権を認められていました。一つは学位を授与する権限で、大学だけが学位を出せる。先ほど、大学校のことを言いましたが、防衛大学校とか自治大学校では学位が出せないんですね。大学だけが学位を出せる。ということは、誰が大学という組織のメンバーになれるか、あるいは大学の教授になれるかを決めるのも、大学自身だということです。自治権ということになる。ですから大学にとつて一番重要な特権は、自治を認められているということです。自分たちで自分たちのメンバーを決めることができる、誰がメンバーであるかを示すために学位を発行することができるということです。もう一つ重要なのは、学問

の自由ということ。アカデミック・フリーダム (academic freedom) と呼ばれています。学問の自由は、何を研究するかということの自由であり、同時に何を教えるかということの自由なんです。大学のプロフェッサーはそういう自由を認められた人たちということになります。

皆さん方が高校までに受けてきた教育は、文部省が決めた学習指導要領というのがありまして、一定の教科書があって、それを先生方は教える。そこでは、失礼な言い方かもしれませんが、教える自由は制限されているわけですが、大学の教授は自分の研究の成果を教える自由を持っている。ですから、単に学問をする人たちの集まりだということだけではなくて、自治 (autonomy) と自由 (freedom) の二つを持っているのが大学だということになるわけです。自治と自由を持っていて、しかも学問するところですから、これは社会の中でしばしば批判的な立場に立つことになります。大学は中世のヨーロッパで、教会と繰り返し闘争してまいりました。宗教革命も大学から始まっているわけです。また大学と教会とがしばしば衝突を繰り返したのは自然科学の問題です。例えばガリレオ・ガリレイが「それでも地球は動いている」と言った話は皆さん方もご承知の通りであります。やがて国家が強くなってきましたと、国家

とも闘争をするようになります。これらは全て大学が自治権と学問の自由を持っているところから、生まれてきた問題なんです。

では、日本に大学はいつ生まれたのか。先ほどもちよつと申し上げましたが、日本の最初の大学が生まれたのは明治維新後のことで、明治十年に日本で初めて大学という名前を使った教育機関が生まれました。それは東京大学であります。一八七七 (明治十) 年ですから、十九世紀のかなり遅い時期になってできました。この大学は明治十九年に帝国大学という大学になります。これが現在の東京大学の前身であるわけですが、そういう大学が日本に初めてできさんおりました。江戸時代には、東京大学の一つの前身だといわれている昌平黉という学問所もありました。いまの御茶ノ水の駅のところにあります。湯島聖堂と呼ばれています。他にもさまざまな高度な学問をする人たちや、それを教えるところがありました。そういうところには自治と自由というものが存在していませんでした。初めて自治と自由を持った組織が生まれたのは明治になってからであります。しかも帝国大学という名前になって初めて自治権が認められた。つまり教授会が作られまして、そこで自分たちの中の誰をメンバーに選ぶとか、あるいは学長や学部長を選ぶ権限を持つ

ようになったわけですね。

大学は現在、全部で五七〇校を超えています。わずか一校から始まった大学が一二〇年足らずで五七〇校まで膨れ上がりました。学生は当時、東京帝国大学になってからも五百人ぐらいしかおりませんでした。今は二五〇万人という、すさまじい数になっております。大学がこんなに増えてきますと、恐らく皆さん方は「大学とかがどういう場所か」などということをおまじり考えることはないのだろうと思います。小学校を出たら中学校に行き、中学校から高校に行く。高校を出たらその後には大学があるから大学に行く。

いま、高校を出てからすぐに職業に就く人たちは三割を切ろうとしています。残りの人たちはいろいろなところに行きますが、大方は大学を目指す。大学・短大の進学を希望する人は半数を超えているわけです。「大学の大衆化」と言いますけれども、大学が非常に身近なものになってしまった。こうなりますと、ますます「大学とは何か」などということを考えることはなくなってしまうわけですね。

しかし、こういう変化が起こったのは割合最近のことです。戦前期には大学という名前の付いているところは五十校足らずしかありませんでした。あなた方の同年齢人口の中で言いま

すと、わずかに二、三パーセントの人しか大学に行っていないませんでした。たぶんこの春は、大学と短大を合わせまして四十八パーセントぐらゐになるんじゃないかと思ひます。大変な数です。私が大学に入りましたのは一九五四（昭和二十九）年です。その年の大学・短大の進学率は十パーセントくらいでした。その頃、学生は社会の中で非常に特権的な人たちでありました。高校から大学に行くことは人生の中心の非常に大きな飛躍だった。つまり高校と大学の間には大変な断層があるということを目覚めていました。

私は最初に一橋大学に入りました。それから一年ぐらゐサラリーマンをしてから東京大学に入り直したんですけれども、ここに一橋大学の学生もおられるかと思ひますが、初めて一橋大学の建物を見てびっくりしました。こんな立派な建物は見たことがなかった。それは高校の建物と大学の建物の間に大変な距離があったからですね。ああいう西洋風の建物は、私が住んでいた田舎ではほとんど見ることがなかった。大学というのはこういうものかと大きな衝撃を受けたのを覚えています。それだけではなくて、高校と大学の間には大きな断層があることを示すいろんな装置が、その当時はまだ存在していました。早い話が、今日この中で学生服を着ている人はほとんどおりませんが、当時は

ほとんど全員がまだ学生服を着ておりました。今は応援団の人ぐらゐしか着ていません。そして入学するとすぐに角帽というのを買い置いた。角帽も今は映画やテレビの中でしか見ることはできなくなっていますが、そしてみんな胸にそれぞれの大学のバッジを付けておりました。そういう時代であつたわけでありました。

社会のほうも大学生を重要に見ておられて、学割というのがありました。今でもありますが、当時の学割は半額ぐらゐでしたから、鉄道に乗るのも映画を見るのも非常に安い値段であつたわけです。大学は知識人の集まりで、学生もその卵だと見られていましたから、学生たち自身の意識が高かつた。その一つの現れは自治会活動が非常に盛んだつたということです。社会を変えていくための運動の一翼を担うのは自分たちだというわけで、どの大学にも、学生自治会があり、全学連という組織があり、その全学連は政治的な運動の一翼を担っていたわけです。東京大学でもそうですが、今は学生自治会が成り立っているところはほとんど無いといつてもいいぐらゐですから、世の中が非常に大きく変わったという思ひがあります。

昭和二十年代の末、三十年代の初め頃、大学は特権的な場所だつたんですね。そこで我々は否応なしに断絶を経験させられました。ある学者は大学のこのような特権的な時代をエリー

ト的な段階の大学と呼んでいます。しかし、いま私たちは非常に大衆化した大学の時代にいるわけです。学生たちが角帽もかぶらなくなり、学生服も着なくなつたのは当然のことです。町の中にいて若者を見かければ、二人に一人は必ず大学生だという時代になつてしまつたからです。高校の延長上に大学があると大方の人たちは感じてゐるのだらうと思ひます。

しかしよく考えてみますと、大学に入るということは、やはり一つの断絶であり、飛躍なんですね。例えば、皆さん方の誰もが恐らく経験してきたであろう入学試験は、高校と大学の世界がいかに違ふかということを目覚めさせてくれる一つの装置になつてゐます。どこが違ふのかといへば、入学試験という大変厳しくて苦しい受験競争を突破して入つたとたん、大変自由な世界が開けてゐる。大学入試はその自由を味わう最初の段階です。どうしてかといひますと、皆さん方はどの大学、どの学部を受けるかも、全く自由であつたはずですが、親に言われてとか、先生に勧められてということはあるかもしれませんが、自分で選ぼうとすれば選べる世界、大学も学部も選べる。いくつ選んでもいい、受けてもいい。その上、お望みとあれば何年浪人してもいい。浪人して最後まで自分の行きたい大学に固執してそこを突破しようと努力することもできる。日本の社会の中で、これは自由

な時間になつてゐるわけです。やがてあなた方は卒業して就職をするでしょう。就職先が決まらないということは大変なことで、必死になつて四月一日には全員がどこかの会社に入らうと思つて努力をする。しかし、入試については「まあ一年ぐらいいいか」ということがあるわけですから、ずっと自由度は大きいということになります。

ただ自由ということとは不安と裏腹の関係にありますから、不安な、しかし自由な時間を過ごすことになります。「自由で不安な時間を過ごす」ということはどういうことかといへば、皆さん方が青年期という時間を持つようになったということ。子供の世界から大人の世界へ移つていく、その一つの象徴的なものが入学試験だと考えることができるのではないかと思います。入学試験は、あなた方がこれまで過ごしてきた高校という世界から、大学という全く別の世界へ飛躍するための、一つのステップとしての意味を持つてゐると見ることが出来る。皆さん方は大学に入ると同時に、家族とか自分が住み慣れてきた地域社会からも離脱する、家を離れる、故郷を離れるということを経験する。これまでの子供の時代のさまざまな絆を断ち切つて、新しい別の世界に入つていく。そうすることによって自由になるわけです。

大学は皆さん方に学生という身分を与える

ことによつて、同時にそういう自由を保証してくれる場所でもあるわけです。最近では風光明媚な田舎にある大学もありますけれども、もともと大学は都市にあつたものです。ヨーロッパの大学はほとんど全てが、その当時の都市にありました。「都市の空気は人を自由にする」という、ある歴史家の言葉がありますけれども、都市はヨーロッパの中世社会を考へてみればお分りいただけるかと思いますが、非常に自由な空間でありました。全体が農村社会、階級制があつたり、家があつたり、地域社会の絆にみんな人がつながれてゐる、そういう中に離れ小島のように都市があつて、その都市に自由を求める人々が集まつてくる。そういう自由な雰囲気象徴するものが大学でもあつたわけです。ですから家族を離れたい、自分がいま所屬してゐる身分や階級から別の階級や身分に移つていきたいと希望する若者たちが、大学に自由を求めて集まつてきました。大学は中世の社会の中で、事実上、若者たちにとつてさまざまな絆からの解放を約束してくれる唯一の自由な場所であつたといつていいと思います。そこだけが自由な青年期を楽しむことができたということ。academic freedom と autonomy——自由と自治。そこに入った学生としての自由な生活。そこは単に自由に学問をする場だけではなくて、自由な生活をする場でもありました。

学生たちは酒を飲んだり歌を歌つたり恋をしたり、大変楽しい、しかしお金とは無縁な生活をしておりました。

大学は一つの組織でありますから、学生たちがあまりハメをはずせば困ります。学生たちに規律を守らせなければいけない。大学の教授たちは自分たちは学問の自由を楽しんでおりますが、学生が完全に自由になつてしまつては困るわけです。勉強してもらわなければ困りますので、そこで規律と自由という問題が出てきます。都市というのは自由だと言いましたけれども、大学ほど自由ではない。大学と町はしばしば闘争をすることもありました。大学のことをガウンと言います。大学の先生たちも学生たちもガウンを着てゐる。町のことをタウンと言います。「タウン (town) とガウン (gown) の対立」ということがよく言われました。大学は自由を強調する。都市は市民生活がありますから、大学があまり自由で野放図では困る。そこで、対立が繰り返されたわけでありました。大学は自治権を持つておりましたから、例えば学生が罪を犯した場合には、それを裁く法廷も持つていれば、監獄も持つていました。ヨーロッパの大学には今でも監獄が残つておりますし、また、アメリカの大学へ行きますと今でも見る事ができますが、体の頑丈そうな、ピストルを腰にぶち込んだキャンパスポリスがあります。自

由を認められているということは、自分たちで自治能力を持っているということでもありません。大学は規律を要求する世界でもあったわけですね。しかし社会全体から見れば、学生たちはそこで自由な青年期を送ることができました。

日本にも明治の初めに大学ができますと、同じようなことが起こります。その当時、夢を持った若者たちの一つのキャッチフレーズは「上京遊学」、東京で学問をするということでした。その当時に東京にありました大学や学校の案内を書いた本が、明治二十年代になりますと何種類も出ているんですが、それらを見ますと酒色の巷に溺れてしまうので、故郷に錦を飾ることのできる者は十人に一人程度しかいないという話があります。東京にやってきて自由な雰囲気の中でハメをはずして、結局、学問のほうは成らないで故郷に帰ることができない若者がたくさんいるということを警告する意味で書いた本が何種類も出ているわけです。明治の東京は、あるいは学校・大学は、そういう自由な雰囲気を持ったところでありました。大学は自由な時間と空間を与えてくれるところだと申しましたが、その中心はヨーロッパの大学の場合に、英語でカレッジと呼ばれる学寮にありました。学生寮です。カレッジというのは大学の別の呼び方としても知られていま

すが、貧しい学生たちが多かったので、慈善家が寄付して造った学寮に住んで、そこで生活をしながら学問をする。時には大学の若い先生たちがそこで学生たちと一緒に生活をする学寮もありました。この学寮を教育と人間形成の場としてうまく活用してきたのはイギリスの大学であります。オックスフォードやケンブリッジ、イギリスではオックス・ブリッジと二つを合わせていわれる大学に行つてご覧になった方もあるかもしれませんが、この二つの大学がある大学町、ケンブリッジとオックスフォードの町中にはカレッジが散在しています。学生たちはカレッジに席を置いて、そこでチューターと呼ばれる先生たちから教育を受け、共同生活をするようになっていきます。つまり教師と学生が共同生活をする、まさに徒弟と親方の関係の大学の中における一番基本的な形ということになるのかもしれませんが。

アメリカの大学に行つてもそうですが、現在でも、どこに行つても学寮があります。学寮は大学のキャンパスライフの重要な部分になっているわけです。それは単に寄宿する、そこに寝泊りするということだけではなくて、一つの人間形成の場でもある、教育の場でもあると位置付けられていることが多い。もちろん中には単なる寮になってしまっているところもありますけれども、人間形成の場として重要な位置

を占めています。

この学寮は、実は日本にも入ってきた時期があります。それは、やはり明治の初めで、一番よく知られているのは旧制の高等学校の学寮です。旧制の高等学校は旧制の帝国大学に入学する人たちの予備教育機関でありました。そこに入る時には非常に激しい競争がありますが、いったん入りますと、あまり自分の希望をいわなければ三年経って帝国大学のどこかの学部に入れるところとして旧制高等学校は存在していたわけです。旧制高等学校はその上に試験が無いわけですから、全体とすればあんまりガツガツ勉強しなくても、ともかくどこかの帝国大学の学部に入れるということで、自由な空間を学生たちに提供していました。この旧制高等学校の中にはいろいろありますけれども、全寮制をとっているところもありました。少なくとも最初の一年間は全員が寮に入らなければいけない。その典型例の旧制第一高等学校は、昭和の初めにいまの東大の駒場キャンパスに移りましたが、以前は向ヶ丘の東大農学部の方にありまして、一年生には全寮制をとっておりました。

いろいろな話があるんですが、今の民主党の政治家、鳩山由紀夫・邦夫兄弟のおじいさん、鳩山一郎は総理にもなった有力な自民党の政治家でありました。彼は旧制の第一高等学校か

ら東京帝国大学法学部を卒業しているわけですから、そのお母さんが大変な賢婦人で、お父さんも著名な、東京大学の教授を務めた法学者でありました。息子が一高に受かって、全寮制だったので、お母さんが寮を見に行ったらしいんですが、あまりの汚さにびつくりして「教育上、とても我が息子をこんなところに入れることはできない」と言ったのですが、当時の第一高等学校の校長が「寮に入らないのであれば、入学を取り消す」と言いました。結局、鳩山一郎は寮で暮らすことになるんですが、そのくらい寮生活は旧制高等学校の中では重要な位置を占めていたわけです。

同じ世代の若者たちが集まって、そこで自由を楽しむ。旧制高等学校の寮は自治寮であるといっておりました。この寮は向ヶ丘という丘の上にあつて、旧制一高の校歌に♪栄華の巷低く見て 向ヶ丘にそそり立つ♪という歌詞があります。「栄華の巷」というのは、いわば俗世間といえますか、我々が普通の社会生活をしている場所です。それを低く見て「自分たちはそれとは全然違う世界にいるんだ」という強い自負心が、寮の自治の精神を体現していたわけです。彼らは籠城主義とも言うておりました。つまり、一高の寮に立て籠もつて「俗世間と自分たちは関係ない生活をするんだ」ということであります。三年間経ちますと、専門教育を受

けて、やがては俗世間に出ていくわけですから、でも、三年間の旧制高校の生活は、自由を許された、若者たちの他の世界とは隔離された空間だという意識を彼らは持っていたわけです。

そういう寮はこの大学にもある時期まで存在していました。私も先ほど、一橋大学の卒業生だと言いましたが一九五四年に大学に入学しましてから、一橋大学の小平分校の所にあります一橋寮という汚い、いまから考えてみますと大変な所に住んでいたもんだなあと思うんですけれども、六人一部屋の狭い段ベッドで兵舎みたいな所でしたが、そこに二年間住んでおりました。当時はまだ旧制の高等学校や大学の子科の時代の雰囲気が残っていたんですね。ですから寮は個室ではなくて、共同生活の場でした。食事何も自分たちが共同で管理をしておりました。私が大学を卒業する頃になりますと、寮の生活が変わってきました、学生たちとは「個室でなければ、嫌だ」とか、いろいろ不満を言い出しました。ずいぶん変わってきたと思つたことを今も記憶しています。

昭和三十年代に入る頃から、だんだん日本における寮の性格が変わってきたように思います。大学は、あまり寮を教育の場として重要視しないようになり、むしろやっかいなお荷物であると考えようになりました。これには学生運動が関係しています。寮が学生生活活動家のた

り場になってしまつて、寮自治の建て前のもとに、大学から一切介入されたくないということで、政治的なグループの人たちが寮を牛耳るということが起こつてまいりました。一九七〇年前後の大学紛争の時に、寮が重要な役割を果たすわけです。そこでこの大学も寮を重要視しないで、むしろお荷物であるから廃止しようと考えてようになりました。ここ数年、東大の駒場寮の廃寮問題がくすぶつていて、ときどき新聞等にも出てきますが、旧制一高以来の長い伝統を考えますと、日本の大学における寮の地位が変わつてきたかということ象徴するような出来事ではないかと思ひます。

皆さん方が和敬塾のような、大学の学寮ではありませんが、四年間の学生生活を仲間たちと共に過ごす生活の空間を持つことができるというのは、今の日本では非常に例外的なことだと自覚をしていただく必要があるのではないかと思います。皆さん方は二重にも三重にも、これまでの子供の世界、高校生であつた世界から断絶し、飛躍した世界にいる。家を離れ、故郷を離れて、同時に若者たちだけが集まる共同生活の場の中で、これから四年間のキャンパスライフを送る。そのことが大きな意味を持つていて、ということこそ是非、自覚していただきたいと思ひます。

私も寮生活を二年間したということをお申し

ましたが、今でも寮の時に一緒に暮らした仲間が、ときどき集まって同窓会などを行っています。二年間でしたが、寮生活を送ったことが自分のその後の人生にとっていかに大きな意味を持っているかということを通じて、六十を過ぎて、ことさらに痛感しているわけです。

前置きのほうがずつと長くなってしまいました。したが、「二十一世紀の大学像」というテーマでしたから、もう一度大学の問題に戻りたいと思います。

大学とは一体どういうところかということ。で幾つかのことを申し上げてきました。とくに大学というのは特権と自由の場、あるいは自治と自由の場であるということを言いました。あるドイツの学者は「大学は孤独と自由だ」と言っています。孤独というのは、先ほどもちよつと旧制第一高等学校の話をいたしました。社会から隔絶した場所、社会から離れているという意味での孤独です。しかし、いま大学はこれだけの数になりますと、自由な場であつても、すでに孤独な場ではありません。大学は社会から離れた存在ではなくて、社会の一部になりつつあります。最近では大学の開放とか大学を開くということがしばしば言われています。例えば産業界と交流をすべきだとか、生涯学習者に学習の機会を開放すべきだとか、社会人をもつと大学に入れるとか、いろいろなのが大学に対

して言われております。ということは、大学がだんだん孤独と特権の場ではなくなってきたということなんですね。もつと別の言い方をすれば、これまで知識の創造と伝達の場所は大学以外になかったと言つてもいいわけですが、今は大学以外にもさまざまな知識や情報の創造と伝達の場が生まれつつある。大学だけがそれを独占しているわけではないということになります。

最初にも申しましたが、社会の中で大学はその一部にだんだん組み込まれてきたとあります。進率やどんどん高くなってきたということ、あるいは社会と大学の境界が無くなってきたという意味でいいますと、大学は別に特別な場所ではなくて、断絶や断層よりも連続性が強い場所になってきているわけです。これは時代の変化の一つの方向だろうと思えます。しかし、やはり大学は他の社会、他の組織とは異なるものとしての性格を持ち続けなければならぬ。それは皆さん方一人一人の心の中に、断絶や断層を持たなければいけないということでありま。大学はこれまでのあなた方の生活からの大きな飛躍を求めるところ、飛躍を約束する場所であるということに、もつと自覚的になってほしいと思つたのです。それを可能にしてくれるところが大学である。大学における自由を、皆さん方の飛躍を可能にしてくれる場所としてもつ

と活用し、使つていくべきではないかと思つたわけです。それは大学での四年間の生活の中で、皆さん方が自由を十分に積極的に享受して、自立した個人になっていくこと、大人になっていくことでもあります。

日本の社会はいま、大きな転換期を迎えているといつていいと思います。転換期というのは、これまでの安定的な秩序がどんどん崩れていくことを意味しているわけですね。今いろいろな問題が起こっていますが、それはこれまでの日本社会を支えてきたさまざまな秩序、仕組みが崩れ始めているということだろうと思えます。私は大学を出てもう四十年になりますが、その間の変化には非常に大きいものがありました。最初に一橋大学を出てから、サラリーマンになって一年間務めておりましたが、もう一度東京大学に入り直したということをお申しました。その時に面接してくださった教授が「せっかく就職したのに、それをやめて、どうしてもう一度大学に戻つてくるんだ」と尋ねました。高校の先生になりたいと思つて教育学部に入ろうとしたんですが、「教授の世界も大変だ。会社に勤めていたほうがいいのではないか」と言われました。就職難の時代でありましたので、私のように大学を出て企業に入ったのに、やめてまた別の大学に戻つてくるなどというのは、全く例外的なケースでした。日本ではあまり例

外的なことをしますと、社会的な罰を受けるんですね。当時の日本はそういう傾向が強い社会でしたから、教授は心配して「会社にとどまれ」と言ってくれたんだらうと思います。しかし皆さん方の世代では、それはごく普通のことになりつつあるわけです。大学を出て、企業に入ったあと会社をいくつも移るということがごく普通に行なわれています。また、大学院に入り直すとか、外国の大学院に行くということも多くの人たちがするようになっています。

かつては例外であったことが、今は普通になつてきている。そういう大きな変化があるんですね。それは、今、日本の社会が大きな転換点に立って、いろいろな秩序が変わりつつあるということと、無関係ではないだろうと思います。そういう中でこれからの新しい時代、二十一世紀を担うのがあなた方であるわけです。何が期待されているかといえば、最近特に多くの財界人が口にするのですが「自立的で創造的で、自己責任がとれる個人。強くて、逞しい個人が必要だ」。これから先の不透明な時代を生きぬいていくためには「強い個性、自立性、自己責任感、それからオリジナリティーが必要とされる」と多くの人たちが言っています。それがどれほど大きな変化を意味しているかということとは、日本の社会がこれまで集団主義の社会だとされてきたことを考えれば、お分かりいただけ

るかと思えます。

皆さん方もそうですが、私たちは家族という集団に所属している。それから、村とか故郷という地域社会にも所属している。学校という集団にも所属しているわけです。そうした集団の中で、親の目の届く範囲でこれまで生活してきたわけです。私たちはそうした中で知らず知らずのうちに、集団の中の暖かい人間関係に身をおいていることの、安らぎとか平穏さというもの味わってききました。そういうものをいつも求めているといってもいいと思います。しかしそうしたところからは強い個人はなかなか育つてこない。会社という組織の場合にも、そこで一生、終身雇用・年功序列で定年まで保証される。それがこれまでの日本社会の多くの人たちの期待であり、現実でもありました。しかし、そうした期待が無残に崩れつつあるのが今の社会なんですね。秩序が崩れていくというのは、年功序列や終身雇用の制度も崩れていくというところでもあります。

私たちの時代もそうでしたが、若者たちは一方では冒険を求めながら、他方では安定性を望んできました。一流大学の卒業生になるほど、安定した生活を保証してくれるところに就職したがる。例えば、官庁、役所なら潰れるということはないだろう。産業界でいえば、メーカーは浮き沈みが大きいけれども、銀行は大丈夫

だろう。それで優秀な学生たちがござって官庁や銀行に行く。一流大学になればなるほど、そういう選択肢を選ぶ。それは安定的な人生が保証されるからです。それは悪いことではないかもしれませんが、しかしそうした選択の結果が、いま安定した状態を維持できない現実にさらされているわけです。

恐らく、これからは安定よりも変動の大きな時代になっていくでしょう。変動の時代になった時には、集団の暖かい人間関係の中にどっぷり浸かっているだけではやっていけない。そこで「逞しい個人」と言われるようになっていくのだらうと思います。これまでの人生設計は単純でありえたかもしれませんが、いい大学を出て、いい企業に入れば、それでほぼ定年までいける。しかし、今やそういう時代は終わろうとしている。これまで大学は、そういう世界の中でもとりわけ安定した世界でありました。皆さんもご承知のように偏差値序列というものがありまして、大学の序列が決まっています。黙っていて進学を希望するたくさんのお学生たちが押しかけてきましたから、上位にある大学ほど、自動的にいい学生をたくさん集めることができました。日本の社会の中でもっとも保守的な部分の一つが大学であったと思います。しかし、いまその大学で何が起こっているかと言え、私立大学の間では学生獲得をめぐる激しい

競争が起こっています。十八才になって大学の進学を目指す子供たちの数が、これから先二十年近くにわたって増えることが全くないことがはつきりしてきたからです。毎年、減っています。人口が減れば、入学希望者も実数として減っていきます。その結果として進学率が上がっていくわけですね。しかし、それにも限度があります。入学者の人数が減ればそれだけ大学間の競争が激しくなっていく。国立大学はこれまで親方日の丸だといわれていまして、護送船団方式ともいわれますが、全ての大学がこれまで平等に予算をもらって教育研究をしてきました。けれども今、行政改革との絡みで、国立大学の民営化論まで出てきています。大学同士がお互いに激しく競争しないと生き残れない時代がやってきているわけですね。

大学も今、大きく揺れ始めているということですね。まもなく二十一世紀になりますが、二十世紀は安定の時代ではなくて、大きな変動の時代だろうと思います。そういう中で皆さん方は、逞しい個人になるために、いま与えられた自由を最大限に活用していかなければならぬと思います。

私どもが大学を卒業した昭和三十年代の初めには、例えば国際化ということはまだ、目の前にある問題ではありませんでした。外国に行くなどということはおよそ考えられないよう

な時代であったわけですね。しかし、その時代に私と同期で大学を出て企業に就職した人たちは、やがて十年も経たないうちに世界のいろいろなところで物を売り、物を作らなければならなくなりました。あつという間の変化です。いまは国際化の問題はインターナショナルライゼーション (internationalization) という言葉ではなくて、グローバルライゼーション (globalization) という言葉で語られるようになっていきます。つまり地球的な規模で物事が考えられなければならない。そういう時代に皆さん方はこれから生きていくことになるわけですね。

自由で競争的な社会はさまざまな希望もあるでしょうが、不安な社会でもあります。日本のように集団主義になじんできた社会では、逞しい強い個人というのは生まれにくい。しかし皆さん方には是非、強くて逞しい個人になっていただくかなければならない。それなしには、恐らくグローバルライゼーションが進んでいく日本の未来もないのではないかと思っています。「二十一世紀の大学像」を語るよりも、皆さんにとつての大学生活、学寮生活とは何かということを中心にしてしまいましたけれども、是非この四年間の皆さん方に許された自由な時間と空間を積極的に活用して、逞しい個人に育っていただきたいと思います。

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。